佐久考古通信

No. 11
1978, 5, 31
佐久考古学会

一、昭和五三年度佐久考古学会総会について（予告）
二、昭和五二年度佐久考古学会会務報告
三、昭和五二年度会計決算報告
四、昭和五三年度事業計画（案）
五、昭和五三年度会計予算（案）

&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

昭和５３年度佐久考古学会総会について（予告）

&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&&

１，日　時　昭和５３年６月１０日（土）午後２時～

２，会　場　佐久市野沢会館

３，日　程　ＰＭ２：００～

１）　開会のことば

２）　会長あいさつ

３）　日程説明

４）　議長選出

５）　議　　事

第１号議案　昭和５２年度会務，決算，会計監査，報告及び承認の件

第２号議案　昭和５３年度事業計画（案）承認の件

第３号議案　会則変更の件（会費値上げ）

第４号議案　昭和５３年度会計予算（案）承認の件

その他

６）　閉会のことば

４，講　演　ＰＭ３：３０～

「佐久平の遺跡について」　講師　高村　博文

５，懇親会　ＰＭ４：３０～

会費約１,５００円

以　上

（当日車は御遠慮下さい）

（第１号議案）

昭和５２年度佐久考古学会会務報告

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｓ５２年９月１０日　佐久市野沢会館にて総会及び花岡弘講師による講演「長野県における古式土師器の成立」
林幸彦会員による「後沢遺跡」のスライド大会を行う。

Ｓ５３年１月１４日　佐久市岩村田浅間会館にて第１回例会を行う。この例会において県考古学会より提出された、埋文白書の佐久地区における調査を分担して行うことを決定する。

Ｓ５３年２月　３日　佐久市岩村田稲荷神社前にて、初午に来た人々を対象に野沢南高校郷土史班の会員により、阿久遺跡保存署名を実施する。

Ｓ５３年２月１８日　佐久市岩村田浅間会館にて第２回例会を行う。

Ｓ５３年３月１８日　佐久市岩村田浅間会館にて第３回例会を行う。

Ｓ５３年４月　８日　佐久町鎧遺跡既出資料及び遺跡の立地観察のため、第四回例会を現地において行う。

Ｓ５３年５月１９日　佐久市岩村田浅間会館にて役員会を行なう。

Ｓ５３年１月３１日　佐久考古通信№９発行

Ｓ５３年３月３１日　佐久考古通信№１０発行

Ｓ５３年５月３１日　佐久考古通信№１１発行

Ｓ５３年５月　５日　佐久考古№４発刊

◎　埋文白書佐久地区カード作成

◎　阿久遺跡保存署名実施

昭和52年度会計決算報告

収入の部　　単位円

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰越金	1)繰越金	3.390	3.390	0	
2 会費	1)会費	66.000	33.500	△32.500	
3 委託料	1)委託料	0	0	0	
4 会報売上金	1)会報	10.000	24.000	14.000	
5 寄附金	1)補助金	0	0	0	
	2)寄附金	0	3.000	3.000	
6 雑入	1)雑入	610	0	△610	
合計		80.000	63.890	△16.110	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	
1 報酬	1)謝礼	5.000	6.700	1.700	
2 旅費	1)一般旅費	0	0	0	
	2)役員旅費	0	0	0	
3 需要費	1)印刷費	46.000	43.300	△2.700	通信3回 考古1回
	2)消耗品費	5.000	1.590	△3.410	
	3)食料費	5.000	5.760	760	
4 役務費	1)通信費	15.000	6.300	△8.700	
5 備品費	1)備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1)事務局費	4.000	0	△4.000	
7 予備費	1)予備費	0	0	0	
8 繰越金	1)繰越金	0	240	240	
合計		80.000	63.890	△16.110	

慶弔費

項　目	金　額	説　明
基　金	10,000	
支　出	5,000	与良　清顧門
残　額	5,000	

（第２号議案）

昭和５３年度事業計画（案）

１，総　会　６月１０日（土）
２，例　会　月１回第２土曜日　午後２：００～
３，講演会　６月１０日（土）
４，会報の発行　年１回　（与良，興水，竹内氏追悼特集号）
５，通信の発行　年４回　（７月，１０月，１月，４月）
６，展示会　年１回

（第３号議案）

会則変更の件（会費値上げ）

第５条　本会の運営の経費は次のように定める。
　１，会費　ア　個人会員　年額1,500円
　　イ　団体会員　年額1,500円
　　（ただし，中，高校生については1,000円）
――を「１，会費　ア　個人会員　年額2,000円
　　イ　団体会員　年額2,000円
　　（ただし，中，高校生については1,000円）」
と改める。

(第 4 号議案)　昭和 5 3 年度会計予算 (案)

収　入　の　部　　単位円

項目		年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 繰越金	1) 繰越金	240	3.390	△3.150	
2 会費	1) 会費	80.000	66.000	14.000	40人×2.000
3 委託料	1) 委託料	0	0	0	
4 会報売上金	1) 会費売上金	10.000	10.000	0	
5 寄附金	1) 補助金	30.000	0	30.000	
	2) 寄附金	30.000	0	30.000	
6 雑入	1) 雑入	760	610	150	
合計		151.000	80.000	71.000	

支　出　の　部

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 報酬	1) 謝礼	5.000	5.000	0	講師謝礼
2 旅費	1) 一般旅費	0	0	0	
	2) 役員旅費	0	0	0	
3 需要費	1) 印刷費	90.000	46.000	44.000	通信 25.000 考古 70.000
	2) 消耗品費	13.000	5.000	8.000	
	3) 食料費	10.000	5.000	5.000	
4 役務費	1) 通信費	13.000	15.000	△2.000	
5 備品費	1) 備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1) 事務局費	10.000	4.000	6.000	
7 繰出金	1) 繰出金	5.000	0	5.000	慶弔費へ
8 予備費	1) 予備費	5.000	0	5.000	
9 繰越金	1) 繰越金	0	0	0	
合計		151.000	80.000	71.000	

佐久考古通信 No. 11

発行所：佐久市大字岩村田住吉町 1040の7
佐久考古学会事務局 木内 捷
TEL 02676－8－0617

発行者：由井茂也

編集者：林 幸彦 花岡 弘
島田恵子

佐久考古通信

No 12
1978, 7, 16
佐久考古学会

一　昭和五十三年度総会報告
二　昭和五十三年度会計予算
三　佐久考古学会歴弔規定
四　例会年間日程
五　佐久地方出土の石器の石質について
六　自然と遺跡
七　編集後記

昭和五十三年度総会報告

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

去る六月十日、佐久市野沢会館に於て昭和五三年度の総会が開かれました。

開会のことば、会長あいさつに続き、井上行雄会員を議長に選出し議事に入りました。事務局より、会務、会計決算報告が行なわれた後、会計監査委員の白倉盛男会員より会計監査報告がおこなわれ、承認されました。

続いて昭和五三年度事業計画、会計予算の議事に入りました。事業計画については、事務局案どおり承認されましたが、会計予算については、支出の部で事業計画にある、展示会についての支出が予算に盛りこまれていない事等から質疑があり、再度役員会で検討して、「佐久考古通信の紙上をもって会員の承認を得るという案でまとまりました。(下記参照)

議事終了後、高村博文講師による「佐久平の遺跡について」の講演があり、統計によりわかりやすく説明していただき有意義でした。

講演後は引き続いて懇親会が催され、など[illegible]終了しました。

昭和 5 3 年度会計予算

支 出 の 部

項	目	本年度予算額	前年度予算額	比 較	説 明
1 報 酬	1) 謝 礼	5.000	5.000	0	講師謝礼
2 旅 費	1) 一般旅費	0	0	0	
	2) 役員旅費	0	0	0	
3 需 要 費	1) 印 刷 費	90.000	46.000	44.000	通信 20.000 考古 70.000
	2) 消耗品費	13.000	5.000	8.000	展示会費用含む
	3) 食 料 費	15.000	5.000	5.000	展示会費用含む
4 役 務 費	1) 通 信 費	13.000	15.000	2.000	
5 備 品 費	1) 備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1) 事務局費	10.000	4.000	6.000	展示会費用含む
7 繰 出 金	1) 繰 出 金	5.000	0	5.000	
合 計		151.000	80.000	71.000	

※ 予算の範囲内の流用を認める

佐久考古学会慶弔規定

第１条　本会に、貢献した方に慶弔事及び疾病が生じた際にこの規定を適用する。

(1)　会員の慶事には、お祝いを贈る。

(2)　会員の弔事には、香料を供する。

(3)　会員の疾病には、御見舞をする。

第２条　第１条に概当する事項が生じた際は、その都度協議して決定する。

第３条　本規定における慶弔及び御見舞に対するお返しはいただかないものとする。

第４条　本規定は、昭和５３年７月１日より施行する。

※　昭和５３年度第１回役員会は、７月１日、午後２時より浅間会館に於いて、１８名の役員の出席をもって開かれました。総会において質疑のあった、昭和５３年度会計予算の再検討及び慶弔規定の一部修正が決まりましたので、本紙上をもって報告並びに承認させていただきます。

例会年間日程

昭和五十三年度の事業計画であります『例会』の年間日程が次のように決まりました。

変更があった場合のみ、ハガキで連絡しますが、変更のない場合は連絡をしませんので、各自御了承下さい。

会場　佐久市岩村田浅間会館
時間　午後二時より

七月　八日（土）
八月十二日（土）
九月　九日（土）
十月十四日（土）
十一月　三日（土）会場未定
十二月　九日（土）
一月十三日（土）
二月　十日（土）
三月　十日（土）
四月　八日（土）

※　お互に誘い合い、自己の研究の疑問点等の問題提起などを遠慮なく出し合って、意義ある例会をみんなの力でつくりあげて行きたいものです。

佐久地方出土の石器の石質について

白倉盛男

人類が最初に手にした道具は、自然礫や一部加工した岩石であり、古く旧石器時代から縄文、弥生時代に及んでおり、磨製石器にまで発達している。

金属器も元をただせば、これも又地下資源岩石から利用されており、岩石と考古学の結びつきはきりはなすことはできない。佐久地方の各遺跡出土品で筆者の観察した石器の石質について概観を例記して御批判を得たい。

(1) 旧石器

矢出川、馬場平、柏垂、池の平等の遺跡から出土した打製石器は黒曜石が最も多く、チャート、硬砂岩、粘板岩がこれにつぎ、珍らしいものには産地に恵まれた川上附近からは水晶製のものも稀に発見される。いずれも硬質で、[illegible]ことがあるとされて活用されている。

矢出川の細石器はほとんどが良質の黒曜石で、八ケ岳立科山附近に数ケ所ある産地のものより一段と良質なもので和田峠産のものであろうと推定されている。

その他のポイント等の石器は、チャート、硬砂岩、粘板岩、硅岩で、何れも秩父古生層を構成する岩石で、南佐久郡の千曲川以東の佐久山塊、出口谷以南青沼、出口、大日向、南北相木、川上地域に広く分布するもので、これらの岩石は現千曲川河床礫中に容易に発見採集できるものである。

(2) 縄文・弥生時代の石器

各地の遺跡に最も普通に見られるものは、打製の石斧と石鏃であるが、チャート、硬砂岩、粘板岩が最も多く、稀に玄武岩もある。それぞれ岩石の剥理面が活用されて形成されている。

磨製石斧には、閃緑岩、輝緑岩、粘板岩のものが多く緻密な美しい面と刃を見ることができる。小形のものには蛇紋岩製の美しいものがあるが、これは軟質で実用に耐えないもので、装飾用か祭司用にしたものであろう。

縄文遺跡からは大型な石棒が発見されることがあるが、南佐久地方では秩父産の変成岩緑泥片岩のものが多いが、北佐久となると安山岩製のものが多い。

石皿や凹石、多孔石は大部分が硬質な安山岩の河床礫が利用されていることが多い。

敷石住居址には床に鉄平石が敷きつめられていることがあるが、これはやり型の安山岩の板状節理を利用したものである。

(3) 古墳

古墳の築造には量と質の関係から各その地域で産するものが多く利用されているが、佐久地方には周囲に火山が多いために安山岩が大部分である。

安山岩には板状節理の発達する場合が多く平に大きく割れ易いので大板が得られ易く、これが古墳に活用されることが多いし、中佐都付近では浅間山の泥流末端の流れ山が利用されている例もある。

装飾用や祭司用に曲玉、管玉、丸玉が発見されるが、これは硬質美麗という条件が第一であるので碧玉、赤玉、水晶、稀にヒスイが用いられており、[illegible]祭司用には軟質で

製造容易な蛇紋岩、滑石が用いられている。

(4) 分類

（火成岩）

①安山岩　火山からの溶岩、多孔質のものから緻密のものがあり堅いものが使われる。

②玄武岩　荒船火山だけにある。内山、出口方面一名うずまき石

③閃緑岩　脈岩産地少し、硬くて緻密、緑色

④輝緑岩　産地少し（出口、大日向、北相木、川上）硬くて磨くと美しい。暗緑色

⑤蛇紋岩　緑黄色、軟質、大日向、北相木のみ。

（堆積岩）

⑥チャート　硅酸の化学的沈澱、灰、白、黒色あり、変色紅玉という。硬質良質のもの半透明

⑦硬砂岩　石英細砂で硬い

⑧粘板岩　粘土の沈澱、仙台石と同じもの、黒色、平にはげ易い。

⑨輝緑凝灰岩　黄や緑、黒のものあり、海底火山灰沈澱

⑩砂岩　荒砥、砂の沈澱

（変成岩）

⑪緑泥片岩　佐久に産出なく秩父産、青色

（鉱物）

⑫水晶　硬度7、良質のものは無色透明ガラス状

⑬ひすい　硬度7、緑青色、産出稀

⑭碧玉　産地は限られているが稀に少量産出、青色

⑮めのう　火成岩の中に玉のように含まれている。白、乳白、紅、縞模様

⑯玉ずい　めのうに似ている乳白半透明、

自然と遺跡

三石延雄

上樋井北遺跡の調査の時である。発掘の現場に白倉先生が見えた際に、先生は石についての話をされた。

その話の中で先生は、「石は物を言う」と言われた。私は前から石が好きであり、先生と同じ考えであった。そして又、土も石と同じように私たちに色々な事を教えてくれると思っていた。

然し上樋井北遺跡で汗だくになりながら土に取り組み、草かきでかく土の上には汗が玉となって流れて落ちた。だが土は中々遺構をはっきりと教えてはくれない。なぜであろうか。

いったい住居址がどのようにして土の中に残るのであろうか。こんな事を私は考えて見た。

私は、住む人が居なくなり、自然に潰ぶれて行った家をこの目で見ている。又山の炭焼小屋などが自然に潰ぶれて行くありさまなど

も見ている。そのありさまを見ると、人が居なくなると第一に周りに雑草が生い茂る。そして屋根が次第に腐って落ちる。そして小屋組がつぶれるまでには何年かの年月がかかる。又、家が火災で焼けたにしても周りに雑草の生える事は同じである。物は腐れば腐植質となり土に還元する。

自然と農耕

もうずっと前の事である。読売新聞の社説に農業を論じた記事があった。其の一説に、「地球の皮をしんむいて」と言った言葉のあった事を私は覚えている。地球の皮をしんむく農耕は確かに自然破壊であり、又本格的な農耕の始まったのは、弥生時代とすれば自然破壊も又比の頃に始まったと言える。

草や木は繁茂して大地を保護し、農耕は雑草を除去する事に依って営なまれる。地表の雑草を除去する農耕は、時には雨水により土が流されて地形を変える。

住居址内の石

[illegible]

覆土の中の石は、自然堆積ではないと言う事であった。或いは土地を農耕に使用するためか、又は二次的に住居を作るためなどの目的で石を入れて周囲から埋立てたように考えられた。

或いは住居址内の石の中には、何らかの目的をもって入れられた物もあるとは考えられるが、いかに洪水と言えども周囲の土地を破壊しないで、住居址内に土や石を流し込む事は不可能である。したがって石や土器片の多くは凹に投入された物のように考えられた。

なにか私たちの日常生活は、一方では自然にしたがい、又一方では自然に逆行して営なまれている。

一農夫である私の一生は、雑草との戦いであったと言っても過言ではない。

かたくり

編集後記

暑い日が続いております。

佐久考古通信№12号をお届けいたします。今年度総会で、通信の発行予定月が決まりました。

七月、十月、一月、四月の四回です。自己の意見や研究を気軽に交換し合う場として大いに通信を利用して下さい。

原稿をお待ちしております。

佐久考古通信№12

発行所：佐久市岩村田1040の7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)8-0617

発行者：由井茂也

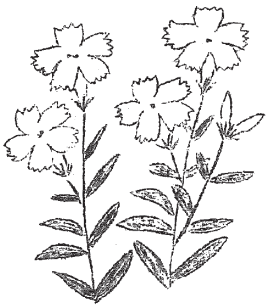
編集者：林幸彦　花岡弘

島田恵子

佐久考古通信

No. １３
1979, 4, 10
佐久考古学会

一　昭和五十四年度佐久考古学会総会について
二　会費納入について
三　韓国歴史の旅から(一)
四　学会の動向
五　新入会員紹介
六　編集後記



昭和五十四年度佐久考古学会総会について

去る四月十日の役員会に於て、昭和五十四年度佐久考古学会総会の日時が決定しましたので御案内いたします。

尚、日程、審議内容等の詳細については、次号でお知らせ致します。

日　時　五月十三日（日）午後二時～

場　所　岩村田浅間会館大会議室

万障お繰合せの上御参席下さいますようお願い申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

会費納入について

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

年度の変り目に当り会費納入の整理を行ないました所、未納の方が大変多いようです。今回、振替用紙を同封しましたので、会の運営のため、またすでに納入済みの会員のためにも、お忙しいこととは存じますが、お忘れなくご送金下さいますようお願い致します。

（会計係）

韓国歴史の旅から（一）

井出　正義

最近韓国人自身による韓国古代史研究はすぐれた業績を示し、特に考古学的成果は目ざましいものがあるという。それと共に、日本の古代史に対する韓国側からの発言力も強まってきているようだ。韓国の文献や考古学に対する理解なしには日本古代史の解明は困難であり、今後は日韓両国の共同研究が強く望まれている。こんな話を聞くにつけ、例の野次馬根情が顔をだし、おれも一つ韓国の古墳や土器をみたいものだと思いたち、以前から誘いかけのあった東アジア文化史研究会の第七回韓国古代史の旅に参加することにした。

七月三十一日十一時東京空港発、同午後一時金浦空港着、京城～板門店～水原～公州～扶余～海印寺～慶州～釜山～京城とまわって八月七日午後三時金浦空港発、七泊八日の炎天下の強行スケジュールであった。長崎大学教育学部の加藤章先生を指導者とし、全国から集まった三十七名の参加者は現職の高校、中学の社会科の担当教諭が大多数だが、小生のようなロートルや変り種もかなりまじっている。女性は三名、韓国語を理解できる人も二～三人はいるようだが、優秀なガイドがつくので、ことばの心配はまったくない。

京城の国立中央博物館は、景福宮内に一九七二年に新築されたもので、韓国の古寺にかたどって設計され、堂々たる美観を誇っている。韓国全体からすぐれた文化財が集められ比較に便利である。韓国古代史の年代を日本と比較してみると、縄文式土器の時代は韓国は櫛文土器、つづいて無文土器の時代で、これは青銅器使用の時代である。つづいてBC五世紀ごろから鉄器時代に入る。初期鉄器時代はいわゆる古朝鮮の時代であり、日本はこの影響をうけて鉄器、農耕文化をうけ入れて弥生式時代に入ったものと考えられる。新羅高勾麗、百済、の三国の成立期は日本の古墳時代にあたり、大和朝廷の成立期である。三国のはげしい対立時代、いわゆる三国時代はわが国の飛鳥時代であり、新羅が半島を統一したのは六六八年である。これを表示すれば次のようになる。

櫛文土器時代　縄文時代
無文土器時代
青銅器時代
古朝鮮
初期鉄器時代　弥生時代
新羅
高勾麗
百済　成立期　古墳時代
三国時代　飛鳥時代
統一新羅時代　奈良時代

信　韓国には、日本の縄文土器のように豪華な

通　文様のものはみられない。櫛文土器には、矢

古　底や押型文がみられる。最近は微隆起線文土

考　器など最古の土器を通じて日本との関連が考

久　えられているようである。無文土器の中には

佐　弥生式土器との近似性が感じられる。板付式

土器と北鮮会寧五洞遺跡の器形の共通性が論じられ、釜山に近い金海貝塚からは弥生式土器そのものともいうべき土器が出土している。

（3）

太形蛤刃、柱状片刃、扁平片刃、扶入柱状片刃等の磨製石斧類や半月形の石庖丁などをみていると弥生式文化にまったく共通するものを感じる。これらは青銅器時代遺跡から発見されるというから、BC三世紀ごろから鉄器青銅器と共に、日本にわたって弥生式文化を形成したものと思われる。

古墳時代の遺物は、まず新羅の金の装飾品の華麗さに驚嘆させられる。金冠や長鎖型の耳飾等の精緻な工芸技術とそのまばゆさは、古事記神功皇后の条に「金銀をはじめとして目のかがやく種々の珍宝さわにあり」と記された。当時の日本人の驚異をまのあたりにみる思いである。これらの形式や技術がわが国の古墳文化に影響を与えていることは一見して明らかである。高勾麗の帯金具も見事なもので、獣面（獅子様）をかたどった一つ一つの金具を細い金の針金でつないでいる。獅子文バックルは須坂の鐙塚古墳（横石塚）からも出土している。

須恵器が三国時代の焼物の主流をなすこともわかった。四耳、六耳の壺が骨壺として用いられていることも日本と同じだ。百済の須恵器はすべて底が円くできている。百済は円の文化といわれるほどに特色があるという。新羅の須恵の台付壺の台には、四角の窓が開いていた。須恵器が古墳時代半島から伝来された新しい焼物であるということも、現実にじぶんの目でたしかめた印象はまた鮮かである。

韓国の銅鐸は十～二十cm位の小型のものだがその形は日本のものと同じであり、舌がついていて、これが音をだす鈴であることがはっきりわかる。これは馬具として用いられた馬鈴であるという。韓国の青銅器時代に馬鈴として用いられた小銅鐸が、日本に伝えられ大型のものにつくられ弥生時代の祭祀に聖なるものとして用いられたものであろう。

勾玉もりっぱなものがたくさんあり、日本独自のものでないことがわかった。明器は日本の埴輪に相当する意味のものとされているが、その動物や人物の文様はきわめて写実的で興味がある。騎馬像型容器などは当時の馬具について知る上の貴重なものという。

丸瓦の蓮華文様は百済、新羅は日本の飛鳥奈良時代のものと共通し、高勾麗のものは、やや感じが異るように思われた。

みおわったとき、古代韓国文化のすばらしさと日韓の共通性について深い感動をおさえられなかった。

儒城温泉ホテルに泊った翌日は、高麗末から李朝初期の窯場として知られる雞龍山窯場跡にいき、段々畑のある小山で草をわけて青磁のかけらをいくつか拾った。きれいな小川で洗ってビニール袋におさめて公州に向かう。途中の農村風景は美しい。自然が豊かに息づいている。

公州は錦江の屈曲部につくられた百済の第一番目の古都である。高句麗のため漢山城（いまの京城付近）を攻め落されて蓋鹵王が戦死したので、子の文周王は南に後退して四七五年錦江中流の熊津に遷都した。これが公州である。以後聖明王が扶余に遷都するまで、五代、六十三年間の百済の都城である。町の人たちはいまだにこの歴史をだいじにし、教育が盛んで教育大学が二つもあるという。

武寧王陵と大書した門をくぐって、宋山里の王陵の谷に入る。谷の右手車窓一帯の山上に円墳の群がるいるいとしてみえてくる。韓国の古墳は樹木で覆われた日本とちがって芝生で覆われお椀を伏せたような丸い墳丘である。史蹟第十三号宋山里古墳群と書かれたりっぱな門と案内所がある。武寧王陵は外見は他の墳丘と何の変わりもない。丘陵の斜面につくられた小円墳である。入口に立つと内部は塼できれいに積んである。撮影は禁止だ。電灯がつけられ目が馴れてくると、その内部のりっぱさに息をのむ。さすがに王陵だ。排水溝の崩れから偶然みつかったこの王陵の中にはじめて入った金元龍先生（京城大学教授）が、あまりの大発見にふるえてしまったというのも事実だろう。一枚一枚の塼の小口にはすべて文様がつけられ、これをきれいに小口積みにしてアーチ型の天井を構成し、全体として内部は大きなかまぼこ形をしている。長方形の床面もまた塼が敷きつめられ、羨道部と玄室は段差がつけられている。西洋のおとぎ話の中の宮殿を見ているようだ。羨道の入口を塞いでいた大石も傍に立てられている。その前に石獣の像が古墳を守るかのように置かれていたという。墓誌銘によってこれが武寧王とその王妃の陵とわかった。この王陵は昭和四十六年七月に偶然発見されるまで全く盗掘をうけておらず学界にはかり知れない資料を提供した。武寧王は名を斯摩といい、日本書記には日本で生まれたと記されている問題の王で、五〇一年に即位し、五二三年に没している。これは六世紀の古墳である。武寧王のすぐ下方にある第六号古墳もほぼ同様の規模をもつ塼槨式の横穴式石室で、壁面全体を漆喰状塗料で塗り、四壁に四神と雲文が描かれている。

宋山里古墳群は約七十基といわれ、公州に百済の都城が置かれた五世紀末葉から六世紀前葉にかけての王侯貴族の墓である。日本の横穴式石室をもつ後期古墳と関係の深いものと思われる。日本とは異る博室墳（九州にはわずかだが存在する）だけでなく、天井を大石で覆ったものや墳丘の前方に方形の壇を持ち、前方後円墳の形式と似かよったプランのものがあるという。また天井石を合掌形に組んだ石室もあり、二号墳からは獣首面帯金具を出土し、須坂の鎧塚二号墳出土のものがこれに類似しているといわれているが、いずれもみることができなかった。

公州国立博物館は、市街を一望する高い丘の上にあるりっぱな建物である。韓国の国立博物館は京城、公州、扶余、慶州とどれも新築のすばらしい近代建築であり、この国の文化財尊重に対する国家的な期待の大きいこと

が感じられる。館内の陳列品はすべて武寧王陵の副葬品で、その数は二五〇〇余点という。墓の入口を守っていた石獸、王と王妃の名を刻んだ墓誌石、王、王妃の純金製冠飾、耳飾等ただ感嘆の息を発するばかり、王陵の妖気に圧倒されてしまったような感じだ。

百済第三番目の古都扶余は、公州よりも広々とした盆地で、豊かな水田地帯をひかえ、全体として飛鳥を思わせる地だが、それよりずっと大きく、悠々と流れる白馬江（錦江）によって中国、日本の港に通じ当時国際的な王都であったことが実感される。百済朝こそ飛鳥朝の本国であるといった現地学者の説も一応うなづけるようなたたずまいである。

武寧王の子聖王（聖明王）が宿敵高勾麗に対する防衛のため都を公州から錦江下流約三十kmの扶余に移したのが五三八年で、それから百済滅亡に至る六六〇年まで一二二年間の都である。扶余博物館長金先生の案内で、博物館〜扶蘇山城〜落花岩〜白馬江とめぐり、白馬江を舟で下る。百済滅亡にあたり、扶蘇山上に追いつめられた多数の宮女が岩頭から散る花の如く白馬江に身を投じたと伝えられる。その落下岩を仰ぎつつ、水量豊かな白馬江上から古都を望めば、当時の百済王宮（現博物館付近）は背後に標高一〇〇mの扶蘇山城を負って、二重の城壁をめぐらし、東西に延々たる羅城を走らせ、前面に繁華な町なみをほこっていたという。古代国際都市の姿が幻のようによみがえってくる。七世紀、大和朝廷の使節や軍船がこうしてにぎにぎしく入港してきたことであろう。仏教や美術工芸もここから飛鳥に伝えられていった。百済と大和朝廷の関係の深さが容易なものでなかったことが察せられる。当時は言葉さえも共通に話されたとさえ言われている。六六三年百済救援に向かった大和朝廷の総軍がこの川口の白村江に於て唐の水軍に敗れたことが、この国の運命を決定的なものにしてしまった。そして大和朝廷はこの半島に於けるすべての関係を失ってしまったのである。

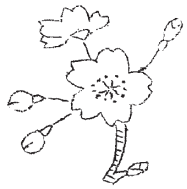
舟から上がって、白馬江大橋を渡って、定林寺跡に石造五層塔を訪ねる。国宝第九号である。第一層の四面に百済を平定した唐の将軍蘇定芳が自己の功績をたたえるための碑銘を刻んだので、平済塔ともよばれる。百済の興亡の歴史を物語る古塔である。韓国の寺院には日本のような木造塔は少なく、三層五塔層十層等の大きな石造塔が多い。豊富に産する花崗岩を用いて精緻な彫刻を施した石造建築は韓国古代文化の高さを象徴するもののように思われる。

扶余国立博物館では、なんといっても瓦と仏像である。飛鳥寺や山出寺出土のものとそのままのような蓮華文の丸瓦をみると百済と飛鳥の関係がどんなに深いものであったかがわかる。中宮寺でみるような半跏思惟像（滑石製）もあった。古瓦はいまでも扶余のどこを掘っても出るほどであると聞かされた。

「扶余は心に感じる古都である」ということばをかみしめながら、金先生に別れをつげた。

（つづく）

（つづきは十五号になります。御期待下さい）



学会の動向

本年度の総会に於て、事業計画の一つに展示会が計画されておりました。

十月に入り準備会が開かれ、期日は十一月三日～五日の三日間、旧中込学校に於て、佐久考古学会、佐久市教育委員会、公民館、佐久市文化財審議委員会の共催によって開催する事が決定し、展示物の復原、準備に約一ヶ月間昼夜に亘り大奮斗しました。こうした考古学会員の努力と共催の方々の協力によって三日間の見学者は千人以上も訪れ、大成功をおさめました。(詳細については次号の会務報告で行ないます。)

七月八日、八月十二日、九月九日、二月十日　例会

七月十六日　佐久考古通信№十二　発行

四月　十日　役員会

新入会員紹介

○内山　俊男　御代田町草越
○荻原　範仁　御代田町草越
○柳沢　文人　御代田町広戸
○大井　豊　御代田町栄町
○尾台　卓一　御代田町元区
○大沢　俊雄　御代田町元区
○山本　太郎　御代田町馬瀬口
○小林　五郎　御代田町一里塚
○堀籠　源　御代田町清方
○桜井　為吉　御代田町荒町
○細萱　勇美　佐久市中込三一二八～五

編集後記

佐久考古通信№13号をお届けいたします。いつもの遅刊にまたまたお詫び申しあげなければなりません。

次号は引き続き発刊の運びとなります。

佐久考古通信№13号

発行所：佐久市大字岩村田1040～7
佐久考古学会事務局　木内　捷
TEL(02676)8－0617

発行者：由井　茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘
島田　恵子

佐久考古通信

No. 14
1979, 5, 1,
佐久考古学会

一、昭和五十四年度佐久考古学会総会日程（予告）
二、韓国歴史の旅から
三、山村考古学研究者の役割り
四、編集後記

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

昭和五四年度佐久考古学会総会日程（予告）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 日 時 昭和五四年五月十三日（日）
午後二時～
2. 場 所 佐久市岩村田 浅間会館
大会議室
3. 日 程 (1) 開会のことば
(2) 会長あいさつ
(3) 日程説明
(4) 議長選出
(5) 議 事
第1号議案 昭和五三年度会務、決算、会計監査報告及び承認の件
第2号議案 昭和五四年度事業計画（案）承認の件
第3号議案 昭和五四年度会計予算（案）承認の件
第4号議案 昭和五四年度役員改選の件
(6) その他
(7) 閉会のことば
4. 講 演 3時30分～
「佐久平の弥生式土器について」
講師 臼田 武正 氏
5. スライド大会・佐久町宮の本遺跡
佐久市清水田遺跡
阿久遺跡
説明 林 幸彦 氏
6. 懇親会 会費千五百円

以 上

右記のように日程が決りました。
尚、議案書は当日受付けで配布致しますので御了承下さい。
お忙しい事とは思いますが、年一回の総会ですので、会員の皆様一人でも多く御出席下さいますよう重ねてお願い申し上げます。
前回の郵便にて会費納入の振替用紙を同封致しましたが、納入はお済みになりましたか？総会までに納入して下さいますようお願い致します。または総会当日に納入して下さい。

（事務局）

韓国歴史の旅から（二）

井出 正義

大邱で泊った翌日は伽耶山海印寺にいく。海印寺は深い渓谷の中にあり、岩と水とそして大きな赤松の樹林におおわれ、日本にきたような懐しさを覚える。ここには韓国が世界に誇る高麗版大蔵経の版木八一、二五八枚がエンタシスの円柱に力強い肘木をのせた二棟の長大な寺院建築の収蔵庫に整然と納められている。この版木は蒙古の襲来を防ぎ、国難救済の悲願をこめて高麗王朝の高宗が一二三六～一二五一年の間につくったもので、いまでもりっぱに使用できるという。この版木で刷った般若心経を記念に買った。韓国では李朝時代に儒教を国教として仏教を排斥したので、仏教信仰がうすれ、戦後はアメリカとの関係かキリスト教がふえているようだが、ここで夏季修業にはげむ像をみて、韓国でも仏教がまだ生きていることを知った。
海印寺から慶州へ向かう途中で皇霊を通る。

水田の多い小盆地だが、ここは三国時代の大伽耶（伽羅）の地である。駕洛国は六駕洛といわれた部族国家の連合体と考えられるが、中でも皇霊の大駕洛（伽羅）は百済にも新羅にも屈せず五〇〇年間の独立を保った。現在でもその伝統が残っていて、この地方の人々はプライドが強く、なかなか他に屈しない気風を持つという。駕洛国は日本書記で任那として日本府が置かれ、大和朝廷の半島支配の拠点とされているところだが、これは日本書記の作為で、支配機構としての日本府の存在を韓国研究者は全面的に否定している。日本府論争は別にして、駕洛国（任那）が地理的にも日本にもっとも近接し、両者の間に密接な関係があったことは明かなことである。バスの左の車窓から見る山の上に丸く芝生に覆われた古墳群が見える。皇霊の駕洛（伽耶）古墳群の中には、長方形の竪穴石室に蓋石をもつものがあり、日本の古墳の形式に近いものが多いということだが、遠望して慶州に向かう。

慶州は地図では狭い盆地と想像していたがかなり広い平野の様相をもっている。市内に入るともうみじかい芝草に覆われた円い古墳の群が目の前にあった。「新羅の古都慶州」に入ったのだと緊張感を覚える。ガイドの金さんが「百済の古墳は塼や石で玄室がきちんとできていたので盗掘されてしまったが、新羅の古墳は木槨のまわりに河原石を積みあげてつくられている。積石塚であるから、盗掘が困難であったから、遺物が残されている」と説明した。新羅の統一前の古い古墳は、地表を掘り下げた土坑内に木槨を置き、その周囲を河原石で積み上げ、さらにその外に土を盛り上げてつくった内部積石塚である。しかし、最近はもと積石塚が本態で、封土は後世の補修だという説もある。また、石室をもった古墳も混在しているということである。

宿舎のレークサイドホテルに荷物を置いて、東洋最古の天文台といわれる瞻星台をみる。博で円形に土部が細まるように積み上げられた、サイロのような形をした塔で、中央部に四角の窓が一つつくってある。一三〇〇年も前の善徳女王のときにつくられたもので、陰陽寮の役人が観測にあたった。底に水をたたえて、窓からさしこむ、日、月の光によって天文を占ったものだという。新羅王城の半月城を左にみて、金氏の始視伝説の鶏林の近くの、旧貴族の邸宅だという瑤石宮で牧生のサービスをうけて夕食をする。現代的な明るい娘たちが多い。韓国の女性も急速に変わりつつあるようだ。

慶州を一日でみるのはたいへんだ。まず吐含山にいく。山頂の石窟庵の巨大な石像釈迦如来像は花崗岩の肌に血が通っているかと思われるような弾力を感じる。韓国石仏の粋というべき堂々たるものだ。仏国寺は複雑な構成美をもつ伽蓋配置を示すが、大雄殿の前庭にある石造の多宝塔（国宝二十号）と釈迦塔は、木造塔のような軽快さをもち、その細部の構造も忠実に表現していて、韓国石造塔の中でも最もすぐれたものと思われる。中央の八角花崗岩幾の石灯竜も統一新羅様式の典型といわれるが、韓国人のすぐれた造形感覚を感じさせる。とにかく韓国の石造芸術のすばらしさに敬意を捧げる。

慶州国立博物館は充実している。庭には韓国の名鐘エミーレー（お母さん）の鐘が置かれている。最も美しい音色をだす鐘だという。

韓国の梵鐘は天頂にパイプがついているのが特色だ。銅剣、銅鉾は日本とまったく同じ、馬衛具は完全な形で保存され構造がよくわかる。日本のものと変わりがない。無文土器は土師器に似た質感で、赤色土器（鉄器時代）は土師器に塗彩したような感じである。金海式土器は太い刷目があり、弥生式土器とよくにている。

金製耳飾や象　列玉首飾などがすばらしい。金冠塚出土の金冠はうしろに鹿角形をつけ、山の字を三段に重ねたような主柱を二本立て、これに数えきれない程の垂飾りを下げている。ひすいなどの勾玉もたくさんある。黄金製の帯はほぼ完全な形で、その金具を細い金の針金でつないだり、さしこんで止めたりする精緻な技法がよくわかる。盛装した王のきらきらとゆらめき輝く姿は、まさに黄金の国新羅の象徴そのものだったことだろう。

金銅三尊仏もすばらしい。なかには指の長さにも足りないような小さいものもたくさんあり、話しにきく秘仏、長野の善光寺の本尊の視形をここにみた思いがしてうれしかった。これらは王候の護持仏として身につけていたものと思われる。そうして日本にもそのようにして伝来されてきたものだろう。軒瓦の唐草文も奈良の古瓦とまったく同じだ。一巡しおわっても立去り難い思いだった。芬皇寺の石塔は現在三層であるがもと九層であったという。古来新羅三宝の一つといわれる。博築のようにみえるが、よくみると安山岩の小石を小口積みにして築造されている。善徳女王三年（六三四）の完成だが、外東の侵略を防ぐ願いをこめて、民衆が一つ一つ石を持ち運んでつくった。四隅に石獣を配しているが、東方はオットセイで、海から来る倭の侵冠に対しているのだという。

古墳公園は、市内の古墳群の集中地区で、大きな円形土まんじゅうが、緑の絨毯をかぶせたように数えきれない程ある。その中を歩いていると、「慶州は古墳の中にある町だ」ということが誇張でないことを知る。古墳の古墳は丘陵の斜面にあるが、新羅の古墳は平地につくられているというのも一つの特色だろう。天馬塚は覆屋をかけ、ガラス越しに内部が観察できるが、内部積石塚の構造をもっていることがわかる。日本の積石塚との関係がこれからの研究課題であろう。たくさんの丸い古墳群の中に、円墳を二つつなげたような双円墳もみえる。

旧新羅王宮の地では鮑石亭跡をみる。王候貴族が曲水の宴を張ったという石囲の水路のあとが残っている。新羅最後の景哀王は、ここで曲水の宴を張っているところを襲われて滅びたと三国史記に書いてある。

南山祥見の三体石仏は、古新羅時代のもので、慶州地方を代表する石造芸術の一つという。男子を生むため男性のシンボルである石仏の鼻をけずってお守りとされた時代があったというが、アルカイックスマイルをたたえた柔和なはれぼったい目をしている。

掛陵は墓域の左右に大きな石人、石獣がならんでいる。円墳の裾には切石の腰石をめぐらし、その一定間隔に束石を立てそれぞれの方位に十二支の像を彫ってある。統一新羅時代の古墳の一つの典型である。

武烈王陵は統一新羅創業の英主の墓である。王陵碑はかこいの中にあるが、りっぱな龜碑の上に螭首がのっている。龜趺は亀の形につくった碑の台で、螭首は碑の上にのせる飾り

で、後足で宝珠を捧げる六頭の竜が複雑にからまる形をしている。現在碑身は失なわれて亀趺の上に蟠首がのっている。現存する最大、最美のものであるという。これは中国の伝統をうけついだものである。武烈王に協力した新羅統一の第一の功臣、金庾信将軍の陵が、すぐ上の丘陵上にある。この名将は金官駕洛国最後の王の曾孫つまり金海金氏の出身であるという。陵は掛陵と同じように腰石をめぐらし十二支神像を嵌石に用いている。遠く吹いてくる松風が涼しい。

これで慶州の見学予定をすべて終ったわけであるが、新羅に対する従来の歴史的認識を改めなければならないことを感じた。新羅は唐に入貢して、その援助を得て、百済、高勾麗を倒して半島にはじめて統一王朝を創業した。大和朝廷はこれに対して総力をあげて百済を救援しようとしたが、唐の高宗が派遣した蘇定方らを将とする水陸十三万（三国史記）の大軍の前に扶余は落城してしまった。（六六〇）日本軍は唐の水軍のため白村江で大敗して（六六三）大和朝廷は半島に於けるすべてを失ってしまった。そして北九州や長門に築城して新羅唐の侵功に備えた。こうして新羅との関係は絶たれてしまったと考えていたが、事実はその後、新羅との関係を修交し、統一新羅の文武王が唐からとり入れた制度や文化を天武持統朝に於て、ひっしと学んで新羅に追いつき、追いこそうと努力した。その成果が白鳳文化となって花開き、大宝、養老の律令の制定となって結実した。その間遣唐使の派遣は行なわれていなかったのである。白鳳文化にみられる初唐様式の影響は新羅との関係に於て成立したものであることを改めてみなおさなければならないと深く感じた。

釜山に向かう高速道路にでる付近に乗馬して弓を射る「花郎」のりりしい姿の銅像が立っている。花郎は国家組織のもとに訓練し鍛えられた新羅貴族の少年たちで、統一王朝最前線に立って勇敢に戦って新羅統一王朝の創業を成しとげた。新しい独立国家の前進を目ざす韓国政府が、青少年の理想像を統一新羅の「花郎」に託そうとしていることが察せられる。

釜山のホテルを出発して金海に向かう。洛東江下流の豊かな米作地帯が展開する。駕洛国の中心であり、日本府の置かれたという任那の地でもある。鉄器や稲作の文化がここから伝えられたと考えられるのにふさわしい景観である。

金官駕洛国創業の主である金首露王陵にいく。入口にある高い朱塗りの異風な門はホンサイムンといって、鳥居の祖形だという。王陵の近くに住む金海金氏の宗親会の会長さんが古文書を手にしてきて説明してくれた。大体の筋は三国遺事の記述によっているが、それなりの主張もあって興味がある。

天から降ってきた六ケの卵から生まれた六人の子が六つの駕洛国の創業者となった。その一人である金首露王は、舟に乗ってきたインドアユタ国の王女と結婚して十人の男子と二人の女子を生んだ。王陵の門にはインドのアユタ国のお城の絵が彫刻してあるが、インドにも同様のものがあるという。王の七人の子は像になった。駕洛国の仏教はだからインドから直接入ったものである。二人の娘のうち一人は日本にお嫁にいき邪馬台国女王卑弥呼となったという。駕洛国にインナ（任那）という一部落はあったが、日本人が入って統

治したということはない。インナ（任那）は現在はあきらかでないが、多分星霊付近だろう。古代に於て駕洛国と日本とは交流のあったことは勿論だが、日本に支配されたことはない。この王の姓は金氏、王妃の姓は許氏（ホー）である。現在韓国人口の約二十％は「金」姓が占めているが、この金氏には本貫（本籍地）が十八ある。このうち本貫を同じくする男女の結婚は法律で禁止されているのだという。同じ本貫（血筋）のものどうしの結婚を禁じているのは李朝時代の儒教の戒めによるものらしい。近く法改正が行なわれるが、従兄弟までは認められないだろうとのことだ。同じ本貫の人たちで宗親会を組織しているわけである。

金海貝塚は平野からの高さ約二〇mの小丘である。前面に広がる水田地帯がかっては入海だったのだろう。一九〇七年今西竜博士（当時東京大学院生）によって発見され、一九二〇年浜田、梅原両博士の発掘まで、数次の調査が行なわれたが、貨泉と炭化した米粒が出土し、南鮮での古代稲作の存在が明らかになり、この米が日本の弥生時代のものと同種であることもわかった。出土土器のうち赤色素焼のものの中に、日本の弥生式土器に非常に類似したものがある。一九三五年の発掘では三組の甕棺と五組の石棺等が発見され、そのうち甕棺からは組形銅剣や銅鈍が発見されるなど、弥生式文化との関係が注目されている。崖の断面からまっ白に貝層が顔を出しているのが印象的だった。

これで韓国旅行の見学のすべてが終ったわけである。京城へ向かうバスの中で、はじめて激しい雨が降ってきた。韓国の水田風景は日本と変わることがない。山は起伏する丘のていどであるが、大きな木のないのが淋しい。緑を育てることは国を挙げての国民運動として推進をはかっているということだ。有事の際は飛行機の滑走路になるようにつくられているというハイウェーをバスは京城に向かってひた走った。

（完）

（前号のタイプミスを訂正します）

3P7行目　金銀をはじめとして
4P11行目　錦江中流の熊津
4P7中段　金元
5P4行目　純金
5P2下段　三層五層

山村考古学研究者の役割り

島田　恵子

六月初旬三石さんと、以前から計画していてなかなか実行に移せなかった、富士見町の井戸尻考古館を見学に行った。

考古館に入り、私たちは先ず驚きの声を発したのであった。そこに展示されている土器は、私たちの想像と感覚をはるかに越えた、素晴しい芸術性をはらんでいたからだった。かの有名な、渦巻文大把手付深鉢や人形のある有孔鍔付土器に限らず、展示されている全ての土器が見事な芸術作品である事に目を見張ったのである。

更に石器類を見て、農業経験者である三石さんが感嘆の声を発している。その声につられて私もケースに近寄った。展示の方法に細い神経が配られていて、一見してその石器がなにに使われていたのか理解できるようになっている。驚いた事にそこには、現在使われている農具の一式が展示されているのではないかと思えるような石器類が集められている

もちろん現在のものは鉄製であるが、その鉄の部分が石であるという事だけの違いなのである。農具の基本が縄文時代と現在と少しも変化のない現実に直面して、藤森栄一先生の焼畑による原始農耕論の論拠の一つを、そこに見出したのであった。

見学が一通り終ってより、藤森先生の「原始農耕論」を本県考古学的研究や独自の方法論を打ち出して発展させている、地元の研究者であり、この考古館の管理責任者であられる、武藤雄六先生と談話し、その談机の上に通乗せてあった、「山麓考古」という小誌を無理にお願いしていただいて帰ってきた。武藤先生とそのお仲間の研究誌であり、ガリ刷り久であったが、その内容は、今までどんなに探佐しても決して接することのできなかった、地元の研究者でなければ不可能とおもわれる、多様な方法論を整え、遺物をより正しく見（よみがえ）らせた地方色豊かな研究発表で埋っており、五冊を毎夜ミットナイトまでかかり、感嘆の声を発しながら五日かかって一気に読了した。この時、真の考古学仲間に出会ったという思いがしたのは何故であろう？

それは昨年、三右さんに教えていただいて、〝植物採集。栽培活動〟と題して、佐久地方独特の考察をまとめた。それによって得た、私の研究の基本姿勢のあり方ともいうべき精神が、その「山麓考古」に満ちあふれていたからであったと思われる。

かって縄文時代、佐久地方にも栽培活動があったのではないかという考えに確信を持つようになったのは、後沢遺跡の発掘作業の苦しい肉体労働を通し、移りゆく四季を、自然の外気に体をさらしながら、流れる汗と共に肌で受けとめることができたからである。それは、地元の人間にのみしか理解できないであろう自然との語らいが、そこに住んだ縄文時代からの人々の生活を推しはかれるからである。

同じように、渡辺誠氏はその著書（縄文時代の植物食）の中で、「われわれ日本人のもつ自然観は、おそらく縄文人の生活にその源をたどれるであろう。血がつながっているということは、単なる生理的現象であるはずはない。」と述べておられるが、それに、現代の私たちでさえ、縄文時代の人々と同じように、春、夏、秋と山の植物採集活動を毎年の年中行事として、かかさず活発に行なっている。後沢遺跡ではお昼休みの寸暇を利用してまで周囲の林の中に入っては四季おりおりの採集を行なった。食べられる植物の種類は、あるいはそれが縄文時代から受け継がれた伝承であるかも知れないと思いつつ、山育ちの考古学に魅せられた者にのみしか味わうことの出来ない感慨に浸るのである。

これは、中央の著明な考古学者には決して味わう事の出来ない感慨なのである。

それは、山村生活者の、その地方の四季の移り変りと、自然に対する充分な認識等が、植物食の利用を歴史的蓄積として持続、発展させてきており、こうした事からも、植物食に関する究明は、地元の考古学研究者に課せられた、今後の課題であると思われる。その先駆者として、藤森栄一先生、弟子の武藤雄六先生とそのお仲間が県内におられ、追しるべとして研究を続けていられる事は、非常に心強いことでもある。

原始農耕論を展開した当初の学界では、その論拠を検討する事もなく、原始農耕論など

とんでもない事だとして、その反響はひどいものであったという。それほどひどい反撃をしながら、最近では、狩猟、漁労という生業の定説の中に、いつの間にか、採集を加えて平然としている学者が多いとの事だが、調べてみると確に古い書物の生業は、狩猟、漁労としか記されていない。次々と発見される新しい事実の前に、その生業は、狩猟、漁労では通用しなくなっての事であると思われる。

又、井戸尻の遺物を自己の目で確める事をなく、原始農耕論を否定する事は非常に危険な事である。現在の感覚でさえ追いつかないあの見事な芸術性を生み出した、生活の基盤とその背景、更に農具としてのあの石器類を、どう釈明するつもりなのだろう？

又、武藤先生が研究してこられた、土器の使用目的と文様の解説は、編年と型式論のみをふりまわして、それを使用し生活していた人間を忘れさせ、それが考古学の在り方であると思い込んでいた私は、思いきりガーンと頭をなぐられた気がしたと同時に、なにか前方に明るい道が開けたようにおもえた。

更に、阿久遺跡の発見は、縄文時代観に今まで考古学界では考えられなかった、認識が新たに加えられてゆくであろうと思われる。

明大教授の戸沢充則氏は、「……略……八ケ岳山麓を中心とした中部高地地方の縄文文化は、いままで中期縄文文化の最も発達した地域として特色づけられてきた。従来からその繁栄の背景は原始農耕の存在によって裏づけされると予測されていたが、いまや荒神山大石遺跡でのアワの発見によってその予測も確実視されるようになった。

そうした中期縄文文化の東中心地の中に忽然と発見された縄文前期の大集落、しかも環状集石群というケタはずれの遺構をもつ阿久遺跡の存在は、いったい何を意味するのか。……略」（信濃毎日新聞・52・10・26）と述べておられるように、原始農耕論の結実への道が一歩せまったのではないだろうか。

また、史学研究において、史観の問題が必ずや要求される。この植物食の研究では特に環境史観をぬきにしては考えられない。と同時にそれは、各々の遺跡の地元の研究者に課せられた役割りなのでもある。その意味において佐久は、地元に根をおろした学会員が大勢いる。それぞれの会員が一つのテーマを追って今まで何十年も発掘をつづけて来られたと思う。今後の研究発表に期待したい！

（五十三年八月三十日記）

編集後記

佐久考古通信№14号をお届けいたします。年度の切りかえ時になって、まとまって発刊してしまい深くお詫びいたします。

佐久考古通信№14号

発行所：佐久市大字岩村田1040～7
佐久考古学会事務局　木内　捷
TEL(02676)8～0617

発行者：由井　茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘
島田　恵子

佐久考古通信

No. １５

1979, 5, 12

佐久考古学会

一　昭和五四年度佐久考古学会総会次第

二　昭和五三年度佐久考古学会会務報告

三　昭和五三年度会計決算報告

四　昭和五四年度事業計画（案）

五　昭和五四年度会計予算（案）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昭和５４年度佐久考古学会総会次第

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1. 日　時　昭和５４年５月１３日（日）午後２時～
2. 場　所　佐久市岩村田　浅間会館　大会議室
3. 日　程　(1)　開会のことば
   (2)　会長あいさつ
   (3)　日程説明
   (4)　議長選出
   (5)　議　　事
   第１号議案　昭和５３年度会務・決算・会計監査報告及び承認の件
   第２号議案　昭和５４年度事業計画（案）承認の件
   第３号議案　昭和５４年度会計予算（案）承認の件
   第４号議案　昭和５４年度役員改選の件
   (6)　そ　の　他
   (7)　閉会のことば
4. 講　演　ＰＭ３：３０～
   「佐久平の弥生式土器について」　講師　白田　武正氏
5. スライド大会　佐久町宮の本遺跡，佐久市岩村田清水田遺跡，阿久遺跡，
   説明　林　幸彦氏
6. 懇親会　会費１，５００円

（第１号議案）

昭和５３年度佐久考古学会会務報告

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｓ５３年６月１０日　佐久市野沢会館にて総会及び高村博文講師による講演「佐久平の遺跡について」を行なう。

Ｓ５３年７月１日　佐久市岩村田浅間会館にて役員会を行なう。

Ｓ５３年７月８日　佐久市岩村田浅間会館にて第１回例会を行なう。

Ｓ５３年８月12日　〃　第２回　〃

Ｓ５３年９月９日　〃　第３回　〃

Ｓ５３年10月２日　〃　展示会についての役員会を行なう。

Ｓ５３年１１月３日～５日　佐久市中込重要文化財旧中込学校において考古資料展示会「佐久の古代を知ろう」を行なう。

Ｓ５３年２月10日　佐久市岩村田浅間会館にて第４回例会を行なう。

Ｓ５３年７月１６日　佐久考古通信№１２発行

Ｓ５４年４月１０日　〃　№１３発行

Ｓ５４年５月　１日　〃　№１４発行

Ｓ５４年５月１２日　〃　№１５発行

展示会準備日程

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本学会の年間事業計画の一つである考古資料展示会は、昭和５３年１１月３日～５日の３日間にわたり、佐久市中込重文旧中込学校で開催された。以下展示会開催の準備日程を記す。

１０月　２日　展示会についての打合せ会議・佐久市岩村田浅間会館（８人）

- 資料収集の方法
- 広報活動の方法
- 復　原
- 展示の方法　　以上について話し合う。

１０月４日～３１日　復原作業

１０月４・５日　佐久市内の個人所有の遺物を借用に巡る。

１０月　５日　パンフ用の写真撮影

１０月５日～１１日　パンフ作成

１０月　９日　展示会について市教委・佐久考古学会・公民館・佐久市文化財調査委員会との４者の協議を行なう。

・ 資料、主催、当日の応援体制等について協議する。

10月11日　パンフレット原稿印刷所へまわす。

10月21日　パンフレット校正

10月25日～30日　ポスター作成及び南北佐久の各所へ貼り巡る。

10月25日～11月2日　展示物の説明書き、遺跡名、所蔵者名、展示資料名、等飾りつけに関する準備。

10月26日～11月2日　手書きパンフレット作成。印刷、製本。

10月29日　遺物搬入のため荷造り。

10月30日　会場へ机、茶幕、等を搬入し会場の設定。

10月31日　展示物を搬入し、飾りつけ及び展示資料を配置する。　パンフ出来上り。

11月1、2日　展示物の配置、飾りつけ。

11月 3日	展示会	スライド映写	午前1回	午後1回
4日	〃	〃	〃	午後2回
5日	〃	〃	〃	〃

11月 6日　あとかたずけ（10人）

11月9、10日　展示会整理（浅間会館）

前記の日程をもって展示会は終了した。準備期間においては、のべ150人の佐久考古学会員有志の昼夜を問わずの献身的な奉仕があった。尚、約70個体の土器の復原、補修を行った。

展示会の展示物

旧石器時代	川上村	馬場平、柏垂、遺跡　　佐久市　榛名平遺跡
	南牧村	矢出川、平沢パイロット遺跡
縄文時代	佐久市	後沢、中村、和田上遺跡
弥生時代	佐久市	深堀、後沢、西一里塚、餅田、大門下、東一本柳、遺跡
古墳時代	佐久市	今井西原、市道、上桜井北、上ノ城、後沢、戸坂、中道、家地頭第1号古墳、東1本柳古墳
歴史時代	佐久市	休石、儘田、戸坂、上ノ城、上桜井北、遺跡

見学者は3日間の芳名簿記載により670名であったが、小中学生、その他の記載もれを考慮すると約1,000余名をのぼるものと思われる。

昭和５３年度会計決算報告

収入の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	240	240	0	
2 会費	1）会費	80000	69.500	△11.500	
3 委託料	1）委託料	0	0	0	
4 会報売上金	1）会報売上金	10.000	0	△10.000	
5 寄付金	1）補助金	30.000	0	△30.000	
	2）寄付金	30.000	3.000	△27.000	
6 雑入	1）雑入	760	1.304	544	
合計		151.000	74.044	△76956	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	5.000	5.000	0	講師謝礼
2 旅費	1）一般旅費	0	0	0	
	2）役員旅費	0	0	0	
3 需要費	1）印刷費	90.000	20.000	△70.000	通信４回
	2）消耗品費	13.000	850	△12.100	
	3）食料費	10.000	20.000	10.000	
4 役務費	1）通信費	13.000	18.400	5.400	
5 備品費	1）備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1）事務局費	10.000	0	△10.000	
7 繰出金	1）繰出金	5.000	5.000	0	慶弔費へ
8 予備費	1）予備費	5.000	0	△ 5.000	
9 繰越金	1）繰越金	0	4.794	4.794	
合計		151.000	74.044	△76.956	

(第2号議案) 昭和54年度事業計画(案)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1, 総　　会　5月13日(日)

2, 例　　会　月1回第2土曜日　午後2:00～

3, 講 演 会　5月13日(日)

4, 会報の発行　年1回　(与良, 興水, 竹内氏追悼特集号)

5, 通信の発行　年4回　(6月, 9月, 12月, 4月)

6, 展 示 会　年1回

7, 見学旅行　年1回

8, 役 員 会　随時

(第3号議案)　昭和54年度会計予算(案)

収入の部　　単位円

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 繰越金	1) 繰越金	4.794	240	3.554	
2 会費	1) 会費	120.000	80.000	40.000	滞納金整理
3 委託料	1) 委託料	9.000	0	9.000	
4 会報売上金	1) 会報売上金	21.000	10.000	11.000	
5 寄付金	1) 補助金	0	30.000	△30.000	
	2) 寄付金	0	30.000	△30.000	
6 雑入	1) 雑入	55.206	760	54.446	
合計		210.000	151.000	59.000	

支出の部

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	5.000	5.000	0	講師謝礼
2 旅費	1）一般旅費		0	0	
	2）役員旅費	2.000	0	2.000	
3 需要費	1）印刷費	144.000	90.000	34.000	通信 24.000 考古 120.000
	2）消耗品費	10.000	13.000	△3.000	
	3）食料費	15.000	10.000	5.000	
4 役務費	1）通信費	15.000	13.000	2.000	
5 備品費	1）備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1）事務局費	10.000	10.000	0	
7 繰出金	1）繰出金	9.000	5.000	4.000	慶弔費へ
8 予備費	1）予備費	0	5.000	△5.000	
9 繰越金	1）繰越金	0	0	0	
合計		210.000	151.000	59.000	

総会用メモ

慶　弔　費

項　　目	金　　額	説　　明
基　　金	10.000	前年残5.000　繰出金5.000
支　　出	9.000	土屋御祝　武藤，高村御見舞
残　　額	1.000	

佐久考古通信 No. 15 号

発行所：佐久市大字岩村田1040～7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)8－0617

発行者：由井　茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘

島田　恵子

佐久考古通信

No 16
1979, 6, 28
佐久考古学会

一、通信十六号を送るにあたり
二、昭和五十四年度総会報告
三、昭和五十四年度年間事業計画日程
四、新役員の紹介
五、新入会員紹介
六、宮の本遺跡敬壇
七、第一、二回例会のお知らせ
八、編集後記

みずなら

通信十六号を送るにあたり

会長　由井茂也

佐久考古通信十六号をお届けいたします。去る五月十三日の総会に於て、五十四年度の事業計画と予算案が承認されました。

別項に載せられる通りでありますが、会員の皆さんの御協力をお願いいたします。

総会や例会を通じ、特に印象に残り、嬉しいことがあります。今迄地域的に偏っていた会員の分布が、佐久全域に渡って新会員を迎え出席者が多くなってきたことです。これは言う迄もなく、開発による著しい遺跡の発見や破壊で過去と異る一般の関心が高まってきたことと、文化財を保護してゆかなければならない時代の要請があるためだと思いますが、佐久考古学会にとっては大きな責任です。

どうか会員の皆さん、農繁期に向う時期ですが一層の御精進と、もう一つ毎月の例会にはぜひ出席していただき度いことを特に通信をかりてお願いしておきます。

昭和五十四年度　総会報告

去る五月十三日、佐久市岩村田浅間会館に於て、昭和五十四年度の総会及び講演会が開かれました。

会長挨拶の後、森泉定勝会員を議長に選出し議事に入りました。

第一号議案〜第四号議案までの討議を行ない、第三号議案まで原案どおり議決され、第四号議案の五十四年度役員改選の件について充分討議を行なった結果、多数の新入会員を迎えた御代田地区より新たに役員を一名増加し、会長以下その他の役員に関しては、一昨年に引続き再選となりました。

議事終了後、臼田武正講師により、「佐久地方の弥生式土器について」の講演が行なわれ、大変貴重な資料のコピーを全員に配布していただき、基礎的な面からの解説は、非常に理解しやすく、手ごたえのある勉強をさせていただき、会員各位の今後の研究に大いに役立つものと思われます。

引き続き、林幸彦会員により、「佐久町宮の本遺跡」「佐久市岩村田清水田遺跡」と、臼田武正会員による「阿久遺跡」のスライド大会が行なわれました。

時間切れとなり、次会のスライド大会を約し、惜しまれながら終了しました。

その後、近くの食堂にて懇親会が行なわれ旧交をあたため合いながら、今年度の活動についてつきることなくなごやかな歓談がつづき、総会の全日程を終わりました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

昭和五十四年度

年間事業計画日程

六月十四日、第一回役員会は岩村田浅間会館に於て開かれ、今年度の事業計画について活発な討議が行なわれた。

年間事業計画について、具体的な日程が決定した事業について、御報告いたします。

1. 例　会

月一回　第二土曜日　午後二時〜

例会年間日程

七月十四日（土）
八月十一日（土）
九月　八日（土）
十月十三日（土）
十一月　十日（土）
十二月　八日（土）
一月十二日（土）
二月　九日（土）
三月　九日（土）
四月十三日（土）

以上の日程に変更があった場合は、ハガキで連絡しますが、変更のない場合は連絡をしませんので、お互に誘い合って御出席をお願いいたします。

＊場所　佐久市岩村田浅間会館前の木造建物
旧広域事務所あと

＊テーマ「赤い土器を追おう！」

この研究テーマも二年目に入りました。今年度は、

① 赤い土器分布図の作成
② 現地の分布調査・出土物の見学
③ 文献目録の作成
④ その他

以上について具体的に取り組む。

2. 講演会

明大教授　戸沢充則氏

日時は未定ですが、由井茂也会長が教授と交渉済みで了解を得ています。

他団体にも共催を呼びかけて大々的に取り組む。

3. 通信の発行

六月、九月、十二月、四月、

昨年は年度の変り目になって連続発行してしまったが、今年度は計画通りに心がける。

それには先ず、会員が積極的に原稿をお寄せ下さいます事をお願いいたします。

4. 展示会

昨年のように準備期間に多くの時間を費さないで小規模に行なう予定。秋頃具体的な話合いは夏に入ってより行う。

5. 見学旅行

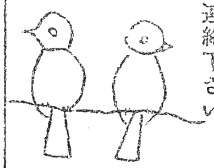
群馬県方面（古墳めぐり）　秋

6. 会報の発行　（年一回）

与良、興水、竹内氏追悼特集号及び例会の総まとめ

以上のように事業計画が決まりました。その他、希望などがありましたら遠慮なく事務局へお申し出下さい。

又、例会の問い合せ等は事務局長（0267６）8　0617へ御連絡下さい。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新役員の紹介

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

○会長　由井　茂也　〒三八四〜二二川上村御所平　電（02679）7〜2401

○副会長　黒岩　忠雄　〒三八四〜〇三臼田町諏訪　電（02682）2487

○副会長　藤沢　平治　〒三八四〜〇一佐久市跡部　電（02676）2〜6677

○地区委員

Ⅰ地区（軽井沢町・御代田町・小諸市）

土屋　実　〒三八四小諸市六供
電（02672）2〜1039

荻原　範仁　〒三八九〜〇二御代田町草越
電（02673）2〜3892

Ⅱ地区（北御牧村・立科町・浅科村）

福島　邦男　〒三八四〜二二望月町片倉

Ⅲ地区（佐久市）

武藤　金　〒三八四〜〇一佐久市平賀北耕地　電（02676）2〜5178

森泉　定勝　〒三八五佐久市岩村田荒宿
電（02676）7〜4777

佐藤　敏　〒三八五佐久市岩村田相生町
電（02676）7〜2075

Ⅳ地区（臼田町・佐久町・小海町）

三石　延雄　〒三八四〜〇六臼田町入沢
電（02682）4101

Ⅴ地区（北相木村・南相木村・南牧村・川上村）

土屋　忠芳　〒三八四〜一三南牧村野辺山
電（02679）3392

由井　明　〒三八四〜一四川上村御所平
電（02679）7〜2046

Ⅵ地区（その他）

臼田　武正　〒三八〇長野市北堀一の一
電（0262）96〜3315

前原　登　〒三七一〜〇二群馬県勢多郡宮城村馬場四六の二

○事務局

局長　木内　捷　〒三八五佐久市岩村田住吉町一〇四〇の七
電（02676）8〜0617

（幹事）

会計　高村　博文　〒三八四〜二二望月町望月五
電（02675）3260

会報　井出　正義　〒三八四〜一二小海町東馬流　電（02679）2〜3171

会報　土屋　長久　〒三八四〜〇五軽井沢町長倉三〇三三
電（02674）5〜5029

会報　青木　幸男　〒三八九軽井沢町星野　星野温泉ホテル
電（02674）5〜5121

通信　林　幸彦　〒三八五佐久市岩村田相生町一九五〇　浅間荘内
電（02676）7〜1562

通信　島田　恵子　〒三八四〜〇六佐久町羽黒下　電（026786）3143

通信　花岡　弘　〒三八四小諸市六供
電（02672）2〜1286

庶務　高村　博文・青木　幸男
林　幸彦・花岡　弘

新入会員紹介

○五十嵐、幹雄 〒三八六−〇一 上田市蒼久保みすず台南 電（０２６８）３６−２８１３

○山浦 幸江 〒三八四小諸市山の前

（高校生会員）

○柳沢 篤 〒三八五佐久市岩村田相生町 三一六八−五 電（０２６７）７−３０６６

○大井 哲夫 〒三八五佐久市長土呂 電（０２６７）７−０４７９

○木南 誠治 〒三八五佐久市岩村田上ノ城二八八六 電（０２６７）８−００７０

○諸山 信弘 〒三八四小諸市柏木 二〇三ノ九 電（０２６７２）２−８２６９

宮の本遺跡歌壇

※注 昨年十一月に行なわれた宮の本遺跡発掘調査において、地元の木内和太郎先生に影響されて、はじめてたしなんだ息作です。

○石敷ける 縄文の世の まつり場に
なに祈りけむ 集ひし人は
木内 和太郎

○遺構掘る 弧状の石組 宮の本
高見沢 鎮一郎

○敷石の 石の重さに つくづくと
背負ひて運びし 人々を思ふ

○土器片の 土を洗ひつつ つくづくと
その文様に しばし見入りぬ

○バラバラに 壊れし土器片 合せつつ
ついため息の 口より出ずる

○土器片は なにやら我に 語るらん
その土器片に 学ぶこと多し
三石 延雄

○古（いにしえ）の ロマンに魅入り 幾年も
土掘る吾が手 黒く荒れおり

○古の おんなの息吹き 創作の
土器にはげしく 現れ燃える

○現われた 配石遺構の 石組みに
縄文の世を かい間見んとす

○注口の ミニチュア土器に たくされた
おんなの祈り 理解せんとす

○敷石に 住みし人の 年月が

炉の焼土に　刻みこまれおり
○ 甦みがえる　屋内祭祀の　祭壇に
祈りし女(ひと)の　こころを推(おも)ふ

島田　恵子

第一、二回例会のお知らせ

昭和五十四年度の第一回例会は、
七月十四日（土）午後二時～
佐久市岩村田浅間会館前の木造建物
旧広域事務所あとで行ないます。

第二回例会は、
八月十一日（土）午後二時～
会場は同じく旧広域事務所あとです。

以前に予定表にメモをお忘れなく！

編集後記

佐久考古通信No.16号をお届けいたします。

一昨年に引き続いて、林、花岡、島田が担当する事になりました。よろしくお願い申し上げます。

昨年の連続発刊を充分反省しつつ、今年こそ計画された発月に添うように努力するつもりです。

次回は9月ですので、会員の皆さんの日頃の研究をお寄せ下さい。

次回は研究発表の特集号で埋めたいものです。原稿お待ちしております！

暑さが厳しくなっております。夏まけをしないよう、もりもり食べて頑張りましょう。

佐久考古通信No.16号

発行所：佐久市大字岩村田1040の7

佐久考古学会事務局　木内　提

TEL(02676)8-0617

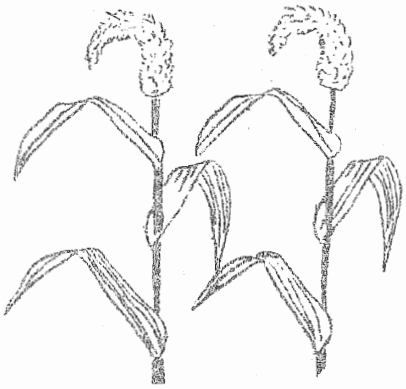
発行者：由井茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘　島田恵子

佐久考古通信

No. １７
1979, 10, 7
佐久考古学会

一、県考古学会役員会報告
二、遺跡研修旅行について
三、例会のお知らせ
四、編集後記



あわ

県考古学会役員会報告

塩尻市　五四・八・二五日

一、県史遺跡カードについて

各地区とも、いくつかの分担市町村はできているが、多くは八月二五日現在まとめ中である。九月中旬頃までには何とか全部提出したい。

事務局からも各担当者に、はがき依頼をする。

佐久地区分担者

小諸市　金井　重忠　花岡　弘
佐久市　藤沢　平治　高村　博文
　　佐藤　敏　土屋　長久
　　木内　捷　林　幸彦
臼田町　黒岩　忠男
佐久町　三石　延雄
小海町　井出　正義
八千穂村　〃
北相木村　由井　茂也　由井　明
南相木村　〃　〃
南牧村　由井　茂也　由井　明
川上村　〃　〃
軽井沢　土屋　長久　青木　幸男
御代田町　〃　〃
浅科村　〃　〃
望月町　渡辺　重義　福島　邦男
立科町　福島　邦男　青木　幸男
北御牧村　〃

一、埋文白書について

現段階で未提出地域。真田町・上田市・青木村・丸子町・東部町・安曇村・松川村・豊科町・三郷村・堀金村・上郷村・豊丘村・泰阜村。以上のうち多くは九月一杯に原稿カードが提出される予定であるが、印刷会社でも困っているし、経費もどんどん増えるので、一四〇万円をこえるのでは、会としても印刷費・発行の問題でなやんでいる。

十月の段階で未提出の分は本文でまとめ印刷をしてしまう。

一、埋文パトロールについて

埋蔵文化財包蔵地パトロール計画

1. 目的　開発事業等が予定されている地域をパトロールし埋蔵文化財の破壊を未然に防止し、その保護対策の資料を得るために実施する

2. 期間　昭和五四年五月二四日～昭和五五年二月二八日

第一次　昭和五四年八月一日～八月一五日

第二次　昭和五四年十二月一日～十二月一五日

3. パトロール地域（佐久以外は略）

佐久市・小諸市・南北佐久郡十四町村

佐久市・小諸市周辺の宅地化・圃場整備事業等が盛んである。高速道路建設の計画もある。

費用　2,000×2回×4人×2日＝32,000

各地区では、カードを各地区埋文委員（佐久地区　林幸彦）に第一次分は九月末までに送る。

委託金は、全額白書印刷費にあてる。

委託金額は県全体で二八万円。

来年度以降もつづける。

一、県学会研究会について

九月二三日・二四日、飯田市でもつ。

責任者　小林　正春

テーマ　弥生式土器から土師器
下伊那の遺跡・遺構・遺物を中心に。

日程　八月二三日、見学会、バスで飯田考古資料館、恒川遺跡
スライド、デスカッション
於下伊那教育会

費用　バス代、宿泊代、懇親会等各自負担、五～六千円

申込み　はがき、先着四〇名（見学バスのみ）。

一、五四年度大会について
十二月二日（日）塩尻市市民会
内容　夏の発掘調査を中心に。発表者は交渉中。

一、会誌発行について
会誌二冊分を白書にあてる。
宮坂英式先生追悼号をだす。原稿をだしてもらいたい。

一、その他
◎総会で会費は前納と決定。会費未納会員には、県事務局でも納入方を呼びかけるが、各地区でも呼びかけてもらいたい。
◎中越遺跡とみんなの集い。は成功であった。近いうちに陳情書をだしたい。
◎図書の保管と発送について
信毎書籍に依頼、保管料、発送手数料を支払うことになる。書籍の注文については、注文から発送までの日数がかかるので承知してもらいたい。
◎藤森栄一賞の選考委員が満期になったが、全員再選でお願いする。　以上
（黒岩）

遺跡研修旅行について

例年どおり、今年度も遺跡研修旅行を計画いたしました。
九月十四日の役員会に於て群馬県方面という大案が出され、その後事務局で検討しましたところ、左記のように概案ができましたのでお知らせします。
なお、参加を希望される会員の方は、十月十六日までに事務局又は、02676～2～2111内線353の木内　捷事務局長までご連絡下さい。
当日の日程、宿泊場所の詳細は後日連絡いたします。

記

1. 日時　十月二十日（土）午前8時～
十月二一日（日）午後4時30分
2. 研集地　高崎市、藤岡市等の文化財
（伊勢塚古墳、観音山古墳、新保遺跡等）
3. 交通　マイクロバス
4. 費用　交通費、宿泊費等で約一万円ぐらいの予定です。

以上

例会のお知らせ

第四回例会は、
十月十三日（土）午後二時〜
佐久市岩村田浅間会館前の木造建物
旧広域事務所あとで行ないます。

第五回例会は、
十一月十日（土）午後二時〜
会場は同じく旧広域事務所あとです。

予定表にメモをお忘れなく！

編集後記

佐久考古通信第17号をお届けいたします。
今号は連絡事項が種々あり、また、タイプの機械が故障したため、ようやくここまで仕上げるだけで精一つぱいで、他の原稿まで手がまわらずお許しいただきたいと思います。
通信がお手元に届いた翌日頃は、例会にあたるのではないかと思います。
どうか万障繰合せて御出席下さい。
佐久の厳しい寒さに向います。
かぜなどに充分ご注意下さい！
例会で、研修旅行で、お会いしましょう。

佐久考古通信第17号

発行所：佐久市大字岩村田1040の7
佐久考古学会事務局　木内　擁
TEL（02676）8〜0617

発行者：由井　茂也

編集者：林　幸彦　花岡　弘　島田　恵子

佐久考古通信

No. 18
1980, 1, 31
佐久考古学会

一、年頭のあいさつ
二、幼稚な戯言
三、例会のお知らせ
四、新入会員紹介
五、佐久地方発掘調査一覧（一）

ムラサキツユクサ

年頭のあいさつ

会長　田井　茂也

新年おめでとうございます。会員の皆さん昨年はほんとうに御苦労様でした。昨年中は一年中、小諸市、川西方面それから佐久市、軽井沢の各市町村に皆さん各自の努力をわずらわした発掘調査が行なわれました。亦、衆のはずれでは野辺山分布調査や野辺山シンポジウムが行なわれ、それぞれすばらしい意義をもったものだったと思います。特に年末佐久市の周防畑A遺跡の調査では、佐久考古学会ので皆さんに御協力いただきました、有難うございました。充実してきた力で新らしい年への発展をさらに期待してあいさつにかえます。

幼稚な戯言（たわごと）

羽毛田　伸博

去年の清水田遺跡発掘調査から、皆様に御目にかかれ本当によかったと感謝致しております。

この一年間を通じ発掘されたものについて感じたことを書こうと思います。

人間が形を造る時、その形態への発想は同じであるという気がします。例えば、物を入れる器は女性に似ている。特に壺は豊かな気分を味あわせる為、妊婦の姿に似せたのではないかとさえ思わされます。現代ものを溜めておく器は女性に似ている。これは丁度コーラ瓶をデザインした人の発想と似ている。（器を人間の体の一部の名称として呼んでいる。）

。高坏は同じ平面化で生活している人間が、尊敬、感謝を表わす為、目線を上にあげることにより表現したのではないかとさえ思わされます。この発想は現代には、日常雑器類対お客様用器、又神仏の器具によく残っている。（形式化され、現代では改全敬味に用いっているとこ

ろもある。）

○勾玉の形、これは脊柱動物が誕生してくる細胞分裂の一段階にこれとまったく同じ形がある。勾玉の糸を通す穴を目にみたててみるともっとはっきりとする。これを単に装飾具と考えず子孫繁のお守と考えれば、現代のお守札とネックレスという分かれた機能で残っている様に思われる。（疑問として現代のネックレスは明治以後、西洋文明の導入によって発達し、第二次大戦後特に女性のあいだで隆盛したが、大古のネックレスの文化は、奈良、平安……と時代が進むにつれ日本人のあいだからどうして消えたのか？仏像にはオリエント文化、ギリシア文化、ガンダーラ文化の影響が形式化されずっと残っているが。）

○物を切る用具（石器・鉄器）、切り込む用具の刃の角度、これは現代に至るまでずっと人間が知恵を傾けてきたことの様に思わされる。又、用具の形態は種質が違っているだけで今と同じである。（疑問として今石器鉄器につけられている名称のせいかもしれない。）

○炉とかまど

大古の人間にとって火は神聖なものであったことだろう。その神聖なものを同じ生活面にまでもってきたことにより人間の文化が始まり、火の多様化が始まったのだと思われます。（現代のエネルギー問題。）

〈炉の時代〉

火を住まいの中に入れるにはその前の時代の人間より火を神聖なものから、そうとう実用的なものへと思想転化したことだろう。現代北陸の旧家（能登地方）を見た折「いろり」が部屋の中央にあり、そこには立派な神棚が備えつけてあった。我々の家で炉を切ってあるのは部屋の中央である。（ここで感ずるのは、祭祀用へ暖房用、炊事用のどれに中心的役割があったか。それと火の住居内にある位置がそれ以後の女性の地位の推移になにか因果関係がある様な気が

する。炉をとりまいての人間の座する位置は決まっていたのだろうか。現代の『座を守る』ということばとの関係。（頑座・下座・ヨリツキ等）又、『いろり』には『ホド』『オクラブテ』ということばの関係。

△かまどの時代▽

ここには炉の時代の人間より火に対する神聖さが軽くなってきたことの証の様な気がする。（しかし、今でも正月に荒神様（釜神様）として祭る。）

そうして中央の位置から住居のはじえと移ることは、住居の部屋分かれの芽ばえではないかと思わされる。ここには暖房用というよりは炊事用に重きを置かれたことの証の様な気がする。又、暖い地方の文化の影響ではないか？　主食が米なぞの植物性の物への芽ばえではないかと思はされる。（疑問として食べ物が前時代に比べ豊富になった為なのか、又、調理方法に調味料的感覚が加えられていたのか。現代かまどの火をたやすな。太い煙のでる様な家になれ、という素朴なことばの関係）

ここにはへかまど▽へいろり▽の文化圏がある様な気がする。

○生産を生み出す用具総体についての感じは受動的用具と能動的用具に分かれる様な気がする。

△受動的用具

植物的であり、平和主義的であり、自然界の法則に支配されているという謙虚さが感じられる。

円形的発展

△能動的用具▽

動物的であり、攻戦的であり、人間の知恵に支配され自然界からはみだそうとする傲慢さが感じられる。

鋭角的発展

現代の我々が、社会のいろいろなことに当って、人間の心の中にある二元性への葛藤は、太古の人間も又、同じ様に経験したことと思わされます。

これらのことを書いているうちに目新しい物へのファッション性、そして、又、人間社会が進歩発展してきたのではなく人間のこしらえた物質材料が進歩発

展しただけで、総の物の本質はそんなに変っていなく、その本質はごく人間が見慣れている自然界の中にあるのだということを強く感じました。土の呼吸に耳を傾ける位の心の中とりが必要だなとも思いました。

考古学の学問を知らない僕ですから思い違いがたくさんあると思いますが、皆様のご指導を今後ともお願いします。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

例会だより

今年二回目の例会は、二月九日（土）です。

本学会の行事等で話し合わねばならないさし迫った問題が多多ありますので、参暖の差が数しく過しにくい今冬ですが、会員皆様の多数の参加をお願いします。

期日　二月九日　午後一時

場所　佐久市岩村田　成ろく水道隣考古資料室

（事務局）

新入会員紹介

大井　今朝人　佐久市根々井

羽毛田伊博　〃　岩村田

工藤かよ子　〃　根岸

神津敦　佐久市長工区

東城博　〃

以上五名の方が、昨年中に新しく本考古学会に入会されましたようしくお願いします。

（事務局）

佐久地方発掘調査一覧（一）

昭和五十四年一月〜十二月に発掘調査された遺跡を次表にまとめてみました。紙面の都合上今回は、小諸市及び佐久市に限りました。他町村については

次号で掲げたいと思います。

◎佐久地方発掘調査一覧表（昭和五十四年一月～十二月）

遺跡名	所在地	概要
関口B	小諸市大字甲字関口	国分期住3軒、鬼高期住3軒他。
菱形城	〃 大字菱形字中尾根	室町時代
宮ノ北	〃 大字耳取字宮ノ北	国分期住2軒、鬼高期住1軒他。
清水田	佐久市大字岩村田字清水田	弥生中期住1軒、同後期住9軒、鬼高期住3軒他
北西ノ久保	〃 大字岩村田字北西ノ久保	弥生中後、古墳時代等住100余軒他
和田上南	〃 大字瀬戸字細田	弥生中期5軒、国分期住2軒
上の城	〃 大字岩村田字上の城	溝状遺構1基
蛇塚B	〃 大字新子田字野馬窪	国分期住5軒他
芝宮	〃 大字長土呂字下北中原	古墳、平安時代土坑10基、溝2基、特殊遺構1基
同防畑A	〃 大字長土呂字	国分期5軒、特殊遺構他
兵士山	〃 大字香坂字兵士山	国分期住1軒他
五斗代B	〃 大字香坂字五斗代	縄文前期石栄君手他

佐久地方発掘調査一覧表

編集後記

佐久考古通信No18号をお届けいたします。

中近東及びその近辺では、焦臭くなってきており、日本も対岸の火とみてはおれない国際状勢ですが、佐久地方の埋蔵文化財も今年は大規模な開発が各市町村から聞え保護研究に多難さを感じます。まだまだ厳しい寒さが続きます。御身体に気をつけて御励み下さい。（Y・H）

佐久考古通信No18
発行所 佐久市岩村田一〇四〇の七
佐久考古学会事務局
本内捷 〇二六七六－八－〇六二七
発行者 由井茂也
編集者 島田花岡林

佐久考古通信

No. 19
1980, 5, 10
佐久考古学会

一、昭和五五年度佐久考古学会総会次第
二、昭和五四年度佐久考古学会会務報告
三、昭和五四年度会計決算報告
四、昭和五五年度事業計画（案）
五、昭和五五年度会計予算（案）

フリージヤ

昭和55年度佐久考古学会総会次第

1, 日　時　昭和55年5月11日（日）午前10時～12時

2, 場　所　佐久市岩村田　浅間会館　大会議室

3, 日　程　(1)　開会のことば

(2)　会長あいさつ

(3)　日程説明

(4)　議長選出

(5)　議　　事

第1号議案　昭和54年度会務・決算・会計監査報告及び承認の件

第2号議案　昭和55年度事業計画（案）承認の件

第3号議案　昭和55年度会計予算（案）承認の件

(6)　そ　の　他

(7)　閉会のことば

4, 記念講演会　午後1時～4時

「信州の考古学と地域研究」

講師　戸沢　充則先生（明大教授 文学博士）

スライド　「多摩湖の発掘」　〃

5, 懇親会　会費　3,000円

以　上

（第１号議案）

昭和５４年度佐久考古学会会務報告

５４年５月１３日　佐久市浅間会館において総会及び臼田武正講師による講演「佐久平の弥生式土器について」を行なう。

５４年６月１７日　第１回役員会
５４年１０月２５日　２回役員会
５５年３月６日　３回役員会
５５年４月２２日　４回役員会

５４年８月１１日　第１回例会
５４年９月８日　２回例会
５４年１０月１３日　３回例会
５４年１２月８日　４回例会
５５年２月９日　５回例会
５５年３月９日　６回例会
５５年４月１３日　７回例会

５４年６月２８日　佐久考古通信№１６発行
５４年１０月７日　〃　№１７発行
５５年１月３１日　〃　№１８発行
５５年５月１０日　〃　№１９発行

54年10月20日～21日	遺跡研修旅行 高崎市・藤岡市等の文化財 （伊勢塚古墳，観音山古墳，新保遺跡等）
55年3月20日～24日 （3月8日～19日）	考古資料展　「佐久平の弥生文化」　旧中込学校 考古展準備

以　上

メ　モ　欄

昭和５４年度会計決算報告

収入の部　　単位円

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	4,794	4,794	0	
2 会費	1）会費	120,000	76,000	△44,000	
3 委託料	1）委託料	9,000	0	△ 9,000	
4 会報売上金	1）会報売上金	21,000	0	△21,000	
5 寄付金	1）補助金	0	0	0	
	2）寄付金	0	16,000	16,000	
6 雑入	1）雑入	55,206	722	△54,484	
合計		210,000	97,516	△35,516	

支出の部

項目		本年度予算額	本年度決算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	5,000	15,000	10,000	
2 旅費	1）一般旅費	0	0	0	
	2）役員旅費	2,000	0	△ 2,000	
3 需要費	1）印刷費	144,000	10,000	△134000	
	2）消耗品費	10,000	0	△10,000	
	3）食料費	15,000	29,600	14,600	
4 役務費	1）通信費	15,000	8,900	△ 6,100	
5 備品費	1）備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1）事務局費	10,000	0	△10,000	
7 繰出金	1）繰出金	9,000	14,000	5,000	
8 予備費	1）予備費	0	0	0	
9 繰越金	1）繰越金	0	20,016	20,016	
合計		210,000	97,516	△112,484	

（第２号議案）

昭和５５年度事業計画（案）

1, 総　　会　　５月１１日（日）

2, 例　　会　　月１回第２土曜日　午後２：００～

3, 講 演 会　　５月１１日(日)

4, 会報の発行　　年１回（与良・與水・竹内・武藤追悼特集号）

5, 通信の発行　　年４回（６月・９月・１２月・４月）

6, 見学旅行　　年１回

7, 役 員 会　　随　時

8, 野辺山シンポジウム　　１０月

（第３号議案）

昭和５５年度会計予算（案）

収　入　の　部

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 繰越金	1）繰越金	20.016	4.794	15.222	
2 会費	1）会費	80.000	120.000	△40.000	
3 委託料	1）委託料	0	9.000	△ 9.000	
4 会報売上金	1）会報売上金	10.000	21.000	△11.000	
5 寄付金	1）補助金	0	0		
	2）寄付金	0	0		
6 雑入	1）雑入	9.984	55.206	△45.222	
合計		120.000	210.000	△90.000	

支出の部

項目		本年度予算額	前年度予算額	比較	説明
1 報酬	1）謝礼	10.000	5.000	5.000	講師謝礼
2 旅費	1）一般旅費	0	0	0	
	2）役員旅費	5.000	2.000	3.000	
3 需要費	1）印刷費	45.000	144.000	△99.000	
	2）消耗品費	10.000	10.000	0	
	3）食料費	15.000	15.000	0	
4 役務費	1）通信費	20.000	15.000	△ 5.000	
5 備品費	1）備品購入費	0	0	0	
6 事務局費	1）事務局費	10.000	10.000	0	
7 繰出金	1）繰出金	5.000	9.000	△ 4.000	慶弔費へ
8 予備費	1）予備費	0	0	0	
9 繰越金	1）繰越金	0	0	0	
合計		120.000	210.000	△9.0000	

メモ欄

佐久考古通信 No. 19号

発行所：佐久市大字岩村田1040～7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)8－0617

発行者：由井　茂也

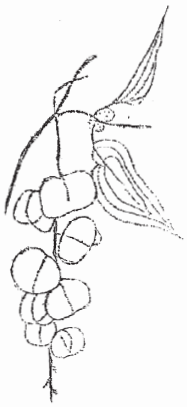
編集者：林　幸彦　花岡　弘

島田　恵子

佐久考古通信

No. 20 号
1980. 7. 10
佐久考古学会

一、昭和五五年度総会・記念講演会報告
二、県考古学会総会開催される
三、周防畑の遺跡調査に参加して
四、武藤　金会員をいたむ
五、新入会員紹介
六、第三回例会のお知らせ
七、事務局だより
八、洞源山貞祥寺の三重塔婆



やまのいも

昭和五五年度総会

記念講演会報告

去る五月十一日、岩村田浅間会館大会議室に於て昭和五十五年度の総会が開かれました。

開会のことば、会長挨拶に続き井出正義会員を議長に選出し議事に入りました。事務局より昭和五十四年度の会務、会計決算報告が行なわれた後、監査委員の渡辺重義会員より会計監査報告が行なわれ承認されました。

続いて昭和五十五年度事業計画・会計予算の議事に入り、事務局案通り承認されましたが、一昨年より事業計画に組まれ未刊である「会報の発行」は、今年度上半期までに発行してほしいとの意見・希望が出され総会を終了しました。

引続き昼食後の午後二時より、佐久考古学会・佐久市教育委員会・佐久史談会共催による記念講演会が開かれました。

講師には、（明大教授・文学博士）戸沢充則先生をお招きし、「信州の考古学と地域研究」と題し約一時間半にわたって講演していただきました。地域研究の系譜を中心に実践例とその特徴について詳細な研究史を学ぶことができ、南北佐久各地から参加した史談会員も大変貴重な講演会が聴けたと来年度に期待の声もありました。準備期間が短かかったにもかかわらず、考古学会員兼史談会員の方々の奮斗の甲斐あって約一〇〇名程が集まり盛会となりました。

引続き、戸沢先生が実践された市民参加の発掘の記録「多摩湖の発掘」十六mmが上映されました。

また、講演会終了後は、戸沢充則先生を囲んで懇親会が持たれ、なごやかな歓談がつづき総会の全日程を終りました。

県考古学会総会

開催される

昭和五五年度長野県考古学会総会が去る六月八日、塩尻市に於て開会される。（詳細は信濃考古により報告の予定）当総会に於て佐久地区からは、佐久考古学会推薦者の中から福島邦男、花岡弘の両会員が幹事として選出され、事務局幹事に花岡、福島が埋蔵文化財保護委員兼務幹事と決定された。

尚、福島会員は日本考古学協会の埋蔵文化財保護委員に県考古学会より推薦される。

会則変更改正

第七条　本会は次の役員をおく。役員は総会において決定する。

会長（一名）会長は本会を代表する。

事務局長（一名）事務局長は事務局を代表し、会務の執行を統轄する。事務局は事務局長の選出する幹事若干名と各地区互選の事務局幹事で構成する。事務局は会務を分担し、その仕事にあたる。事務局は地区持ちまわりを原則とする。

監事（三名）本会の会計監査を行う。

地区幹事、県下各地区から二名を選出する一名は事務局幹事、一名は埋蔵文化財保護委員を兼ねる。

任期　役員の任期は二年とする。但し事務局長・幹事は再々選を認めない。

役員会　会長。幹事・各委員長で役員会を構成し、会の運営にあたる。

第八条　本会の目的を遂行するために次の委員会をおく。

一、常任委員会

(1)　埋蔵文化財保護委員会

(2)　藤森栄一賞選考委員会

二、特別委員会

第九条　本会には顧問及び会友をおくことができる。

以上

又、五五年度事業計画として、秋の大会を佐久地方で開催、野辺山シンポジウムとの兼ね合いで行なう。

県考古学会も野辺山シンポジウムには積極的に参加し、その窓口を佐久考古学会に依頼する。

以上佐久に関係の分を報告

（黒岩）

尚、監事には当会の黒岩忠男氏が県考古学会より推薦されました。

（K記）

周防畑の遺跡調査に参加して

神津　敦

近年郷土のルーツを探る試みが盛んである。誰でも自分が生れ育った土地に祖先がどういう生活をしたか、古代のロマンを知りたいと思うからであろう。

戦後荒廃の時期に山林の開墾の際いくつかの赤色の土器の破片を掘出したが、当時は関心を寄せるひまもなく無為に過してしまった。

それから月日は流れて職場を定年退職した機会に、北米カナダを旅行した。そしてその広大な大陸の行く先々の自然の美しさと共に歴史の浅い国とは思えない独自の特色を生かした博物館があった。

ロッキー山脈の氷河の遺跡、中部大平原の中心にあるサスカストーンの開拓博物館、東部におけるモントリオール、ケベック等初期の移民の生活や宗教等が原住民の歴史や古代生物の化石等と共に詳しく展示されている。

一ケ月に及ぶ旅先で故郷の昔を偲びながら帰国したとき、新聞には神津島と神津の祖先に関する記事が出ていた。

それにしても長土呂の古代はどうであったろうか。遇々郷土史研究会を知り、その縁で周防畑発掘に参加出来たのは幸であった。考古学のことは何も知らず土師も須恵器もその区別さえ知らない素人の冷汗ものであったが掘り出された遺物には遠い先祖を偲び、時を忘れる思いである。

疲れた腰を延ばせば、濁川の田切から長土呂の前方に広がる田園が眺められる。今もある前田、長田、中田の地名は鎌倉時代末期に出来たといわれている。初め長土呂の地は鷺林に開け湿地帯の泥地に水稲が作られるようになって、現在のようになったと言われる。しかし、古くからの地名は長土呂であって長瀞ではない。瀞とは深い水の流れが澱むところ、この地の古い地名には長土呂、長殿、長戸呂と書かれ、奥川における佐久の諸町林にある長瀞村は山形県にあるが異るようである。そこは最上川の曲りくねった澱に近く、埼玉県の景勝地長瀞と同じであった。

ともあれ周防畑遺跡には、遠い祖先の跡が

偲ばれると共に、これから先の遺跡調査が楽しみである。又、諸先輩の御指導を今後共よろしく御願い申し上げ、素人の拙文を終ります。

武藤金会員をいたむ

武藤金氏は、四月六日午前八時二五分胃ガンのため佐久総合病院で亡くなられた。75才。

昭和四六年の戸坂遺跡より発掘調査に参加され、以後氏のすべてをかけて発掘調査活動に努められた。常に佐久考古学会の進展のために憂慮され、会員の指導にあたられた巧績は大であり、氏亡きあとの佐久考古学会推進のために今後一層の会員の結束が必要であろうとおもわれる。

また、昭和五十三年には、氏が保存会長をされていた「平賀氏城跡」を発刊される等、文化財保護への指導は地域に根ざしており、在野の研究者として貴重な存在を占めた方であった。

ここにつつしんで武藤金会員のごめい福をお祈り申し上げます。

新入会員紹介

◎佐々木　宗昭　〒三八四－〇七　八千穂　村上畑

第三回例会のお知らせ

日　時　八月九日（土）午後二時～

場　所　岩村田浅間会館前の佐久広域事務所あと

テーマ　赤い土器について　その他

（都合により8月はハガキ連絡ができませんので今から予定表に記入してお忘れなく）

事務局だより

昨年十一月佐久市教委より調査依頼があり佐久考古学会が調査（団長　由井茂也会長）した、周防畑遺跡の調査報告書が会員各位の御協力により発刊されました。

寒い中、整理作業に奉仕協力下さった方々をはじめ、作業の場は、洗い、註記・接合、石こう復原、実測・写真撮影等には各家々のお座敷が使われ家族の方々の協力によったり、又、大変無理なお願いにもかかわらず、忙しい勤務の合間、徹夜で原稿執筆をして下さった会員の方々等のただならぬ協力によって、この度の発行と相なったわけです。紙上より厚くお礼申し上げます。

尚、各会員に一冊ずつ贈呈いたします。送料の予算がありませんので、なるべく直接お渡ししたいと思いますので、例会に御出席下さいますようお願い申し上げます。

洞源山貞祥寺の三重塔婆

武藤　金
井出　正義

この三重塔婆は、もと小海町の松原湖畔の神光寺に在ったもので、明治初年の神仏分離令、排仏棄釈により、神光寺は廃寺となり、明治三年四月十八日三重塔は前山の貞祥寺に売り渡され現在の地に移築されたもので、再建二十一年目。

神光寺は古くから、源頼朝の寄進によるという言い伝えをもった三重塔があった。が、文政十二年（一八二九）松原村全焼という災禍にあい焼失。

神光寺別当が三重塔の再建を計画して、名匠の名高い野沢村の宮大工、小林源蔵昌長、（三代目）を棟梁として工事を進めたが、上棟を目の前にして、弘化二年四月四日、工事小屋から出火、三重塔の切組物を残らず焼失してしまった。

弘化四年に再び再建計画ができて、また小林源蔵にまかされた。失火の責任を感じていた小林源蔵は、こんどは、長男の小林一太郎を棟梁に推し、養子に出した二男啓長、三男勝長もよびよせ、自分はその後見人となり、親子こぞって再建にあたった。

（小林市太郎昭長十九歳四代目）議定書によると、

野沢大工棟梁　小林市太郎
小諸家中大工棟梁　立川覚之助
南相木大工脇棟梁　高見沢賢蔵
野沢大工後見　小林源蔵
外に中小田切村清水宗兵衛も脇棟梁として参加したといわれる。
杣方棟梁　稲子村井出栄助
屋根葺師　小諸藩師田中平作
鋳物師　岩村田宿大主伝左衛門
　入沢村山形孫平治

小林源蔵は、着工半で消失したことを思い金拾両を神光寺に寄進した。

嘉永二年（一八四八）八月十七日に完成。
着工以来三年目。
請負金額金六拾両と扶持米六拾俵。

これは、一九七七年、文化財の見方（塔）と題して、武藤金氏が編集発行した。

武藤金氏を偲んで、ここに掲載させていただきました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

編集後記

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

佐久考古通信No.20号をお届けいたします。暑さに向います。会員の皆様夏まけをしないよう！お励み下さい。（K）

佐久考古通信 No. 20 号

発行所：佐久市大字岩村田1040の7

佐久考古学会事務局　木内　捷

TEL(02676)8−0617

発行者：由井茂也

編集者：林　幸彦・花岡　弘・島田恵子